茨城大図書館と水府明徳館

古地図に現在重ね

古地図（手前）と試作した地図を広げて説明する小野寺教授（右）ら

茨城大図書館は水府明徳館と共同で、江戸時代と現在の水戸城周辺を重ねた歴史遺産地図「古地図と歩こう！水戸の城下町マップ」を作成している。過去と現在を重ねることで、今の町の意外な発見ができるとしている。

同館副館長で歴史地理学が専門の小野寺淳教授を中心に、彰考館徳川博物館や水戸商工会議所、県立図書館などが協力して作成が進んでいる。水

江戸時代の水戸城周辺とオーバーラップ

城下町マップを作成

「意外な発見できる」

戸の地図は1650年ごろから描かれているが、比較的精度の高い1830（天保元）年の彰考館所蔵絵図を利用した。日本画家だった横山大観の祖父で地理学者の酒井喜熙（むねひろ）が描いたとされる。

地図はA1判（縦59センチ、横84センチ）。現在の水戸駅南口付近から広がる埋め立て前の現在の3倍近い面積の千波湖が描かれ、湖北岸近くには東西に分かれた町人町の往来のための柳堤（りゅうてい）もみられる。

当時は湖の中にあった水戸合同庁舎の近くには、現在の裁判所にあたる評議所が記されている。旧三の丸庁舎前などを残して消えた堀の一つは、地形を生かして南町3丁目方面に抜ける梅香トンネルとなっている。また、水戸商高がある新荘は花小路や桜小路といった名称だったことが分かる。

細部を厳密に現在の地図と重ねる作業は難しく、今回は大きな間違いがないレベルの復元を目指したという。地図で町人町、武家屋敷などは色分けし、武家や建物の名前を書き入れている。地図の裏面には町名の由来や町の成り立ち、年表などを掲載し、今年度中の完成を目指す。学校での配布や観光への活用を考えている。

水戸商工会議所は地図の完成度を上げようと、20、21日の両日午後1時からタウンウオッチングを開く。試作版を配布し、「参加者から近代の町の変化をぜひ教えてもらいたい」と話しており、意見を元に修正する。

20日はJR水戸駅北口を出発し、弘道館、大町、水戸芸術館を回る。21日は県立歴史館前から偕楽園、金魚坂、南町3丁目会館を回る。各コースとも先着15人。100円。同会議所が主宰する水戸まちなかファンクラブに入会するのが条件。申し込みは水戸商工会議所商工振興課029・224・3315。

【若井耕司、写真も】